

---

## 海外便り

井村君江  
(明星大学教授)

二月二十八日 ロンドンから海辺のコーンウォールの家に帰り書斎に入ると、Folio Classic Club から出版された化粧箱入り三巻の瀟洒な Wilde 選集が、いま私が使っているオックスフォード時代の Wilde の机に載っていた (Birthday Present)。真っ白いカバーに金の模様の付いた1576ページの分厚い本を開くと、Maudsley Allan の悩ましいサロメの舞台写真やパンチ紙のワイルド戯画など、70ものイラストが目に入った。“Wit or scholar? Dandy or genius? Sinner or saint? Praised and damned in almost equal measure ever since he made his first sensational appearance on the world stage over a hundred years ago.” とウィットに富み本質を突いた文句のチランもあった。ちょうど二月九日に日本を発つ前、紀伊国屋と Methuen 社が出した1908年版の Robert Ross の全集十五巻の復刻本が届いた。日本の広告チランでは、Joseph Bristow の研究者向けのその編集方針に敬意を表しておいたが、フォリオ版の選集の方はワイルド愛好者の愛蔵本といってよい造作であり、Oscar Wilde と言う箱の文字も、古典愛好家クラブ会員の配布本にふさわしいような、Wilde が喜びそうな遊び心溢れる粋なデザインである。Wilde の孫 Merlin Holland の解説も、いままでにない角度からの見方がでていた。

三月十九日 『タイムズ』紙の経済面に、Wilde の名前を見付ける。クリスティのオークションの欄である。「Wilde が眼鏡ケースの底に入れて持ちあっていた Charles I の棺の破片が、オークションに出品されたが、800ポンドでワイルドのコレクターに落とされた」と言う短い記事である。興味深いことは、カトリック信者にとってキリストや聖者の聖遺品 (レリック) を身につけていることは大切なことで、ここに Wilde のカトリック信者への姿勢が伺えるのであるが、それが Charles 一世の棺の断片を聖遺品にしていたことが、いかにも Wildeらしいのである。というのはイギリス歴代の王のうち、首を切られていけば処刑されたのはこの王だけだからである。Wildeの遺品としては先月、Colin Franklinの家でいつものように、Wildeがモーダレンで使っていた黄色いブラッシー張りのセティとアームチェアに腰掛けながらお茶を頂いていたが、夫人の Charlotte が突然、この腰掛けは再び前の持ち主に帰るのが良いかも知れぬと提案したので嬉しくなった。前の持ち主とは同じモーダレン出身者である John Lawlor の事で、私の主人だからである。この夏に Colin と Charlotte の気が変わらぬうちに本格的に約束をと思っている。

---

最近アメリカだけでなく本国でもワイルド・コレクターが暗躍しているようで、先日も最近発見された書簡をいち早く購入されたばかりなのである。

四月五日 ロンドンのイズリントンにあるキングズ・ヘッド劇場で、ミュージカル『オスカー』を観る。Oscar Wilde の生涯、劇作家としての全盛期から、裁判、出獄、晩年のパリ時代までの劇化である。コーンウォールの家からボックス・オフィスに電話でキップを予約できたので、劇場かと思いついてみると、同名のパブであった。ビールのジョッキを持つ人たちをかきわけて奥に入ると、小さな舞台があり、ヴァイオリン(3)、ビオラ、エレクトロニック・キーボード(2)の6人編成のバンドに照明が当たり、舞台背景の幕にワイルドのプロフィールが大きく描かれている。ワイルドの好みならホック&セルツァーだが、アイルランドに敬意を表してギネスのグラスを片手に観賞。そうした気楽な良さの中で、舞台と観客がほぼ同じ高さで一つになれ、更に終了後に作者と話しができた。彼の言うことには(これも小劇場の良さ)、こうした舞台で実験的に何回も上演し、その都度、観客の反応や批評を入れて改良を加え、納得のいく良い作品にしてから、ウエスト・エンドの大きな舞台に持って行くのだそうである。この二日後の『サロメ』上演も、キャムデン・スタジオという本屋の二階の小さなホールで(ヨカネンが女性というレスビアン風の、エクセントリックな前衛的な舞台)、双方ともに小屋に溢れる俳優と観客の熱気は、芝居好きのイギリスならではのもので、ワイルドは今日も生きているの感すらしたほどであった。

ミュージカルのプログラムの「Book, Music & Lyrics の Mike Read」は、若者に人気のある BBC のディスク・ジョッキーである。なぜ Wilde の半生をミュージカルに作曲したかその動機を尋ねてみると、彼はすでに詩人 John Betjeman や Rupert Brock の詩と伝記を作曲しており、今回はその Betjeman の曲を David Essex が歌うので、背景のビデオ撮影のためにオックスフォードのモダレン・カレッジを訪れ、Wilde も同じカレッジなのに気づき、その波乱の生涯を読んで同情したからだと言う。Read は人間オスカーを、ヴィクトリア朝時代からの偏見から解放した次元で描こうとした。容貌も長身な姿も Wilde に似ている主役の Nigel Williams は、Douglas への友愛と、Constance や子供への家庭愛に揺れる心優しい人間 Wilde を歌い演じ、Daniel Goode の angelic な声と容貌の Douglas と、対比的に鋭角的で力強い Bill Homewood の Queensberry 侯などよいアンサンブルであったが、なぜか時折、Andrew Lloyd Weaver の *Cats* を思い出させる甘いメロディを Constance が歌うのが気になった。孫の Merlin Holland はこのミュージカルの舞台に感激して長い言葉をプログラムに寄せている。“A part of this Oscar you will see tonight, for the musical brings a new aspect to the story with Wilde as a father and a husband” たしかにあどけなく可愛い Cyril と Vyvyan を両脇に抱き、父親 Wilde がフェアリー・テールズを語り歌う場面は、印象的であった。七月に Merlin と会うとき、孫としての感想が直接聞けるのが楽しみである。